

リハビリ療法中に抑うつ、せん妄状態が増強した患者の看護

1 階東病棟

○小笠原麻紀・藤本 洋子・中山 理恵
門脇 知香・久市 修佳・森沢 陽子
武田さとみ・藤村 洋子・山中 久美

I はじめに

一般的にうつ病は、貧困妄想、罪業妄想に悩まされたり、自尊心の低下、自信喪失に伴い日常生活能力が低下すると言われている。

当病棟でも、うつ病患者の入院は多く、その多様性を考えると、個別性を持った看護援助が必要となってくる。今回、リハビリ療法中に、精神症状の増悪のため、ADLが全面介助となった患者が、自主性を持ち、自信が持てるまでになって退院することができた症例を経験したので、ここに報告する。

II 患者紹介

患者 I・H氏 69才 女性 次男家族と同居中 病前性格は明朗

診断名 うつ病

職業 農業

趣味 ラジオを聴くこと、川柳を作ること

入院期間 平成4年4月27日～平成4年7月24日

現病歴

59歳より気管支拡張症で入退院を繰り返すうちに、抑うつ状態が出現し薬物療法を受けていた。平成3年12月、転落による左大腿骨頸部骨折の手術を受け、リハビリ療法で、歩行可能まで回復したが抑うつ状態が増悪し当院へ入院となった。

III 看護の実際

〔問題点〕

抑うつ、せん妄状態が強く、依存的、拒否的でありADLに全面介助を要する。

〔目標〕

精神的安定がはかれ自主的な行動がとれる。

〔経過及び結果〕

患者は、入院時抑うつ状態が強く、「できません」「～して下さい」など拒否的依存的であり、日常生活の看護援助が必要であった。看護婦からの働きかけがなければ終日臥床で過ごし、食事時間になっても臥床したままで自力摂取を全くしようとしなかった。清潔に関しても、「いいです」「放っておいて下さい」などの言葉が聞かれ、全介助が必要であった。また妄想が活発で「息子と孫が殺された」「私は犯人じゃない」など手紙に書いたり、嫁や他人がつらくあたるなどの被害妄想があり、夜間は特に症状が強く睡眠が殆んどとれない状態であった。妄想による苦痛のため、「死にたいです」という言葉も聞かれた。そこでADLの自立に向けて次のような働きかけを行った。午前午後に関らず車椅子に乗せ談話室に連れ出し他患との接触を持ったり、テレビを観せるなどの気分転換をはかった。食事時には必ず椅子に座らせ、そばに付き添い摂取状況を観察し、摂取できない場合は声かけをしながら根気強く食事介助を行った。摂取できた場合は「よく頑張りましたね」と受容的な態度で接し、次回への意欲を持たせた。清潔面では、毎日の全身清拭と週に2回の入浴介助を行った。排泄面では、毎回ポータブルトイレへの移動を介助した。その後、車椅子で身障者トイレに行けるまでとなったが、依存的言動が強く看護婦が付き添うことが多かった。同時に薬物療法としては、セレネースの投与が開始され、その頃より、妄想も軽減した。

その結果、自主的な行動が次第にみられはじめた。食事は自力摂取が可能となり6月中旬には自分で車椅子に乗って、身障者用洗面所、トイレを使用できるようになった。清拭、入浴に対して、最初は拒否的であったが、続けるうちに、「さっぱりした。ありがとう」という言葉が聞かれはじめ、自分から入浴を希望するまでになった。依存的言動は聞かれたが、声かけにより日常生活が自力で行えるようになった。妄想の軽減及び眠剤の調整により睡眠もとれ、精神的安定が得られた。

7月に入り、リハビリでは歩行器や平行棒を使用してしっかりと歩行しているにもかかわらず、「恐いです」という不安の言葉が聞かれ、病棟では車椅子を離せなかった。そこで理学療法士、担当医との連絡を密にしながら、看護婦が付き添って病棟での歩行練習を行った。練習を進めていくうちに、不安の言葉は聞かれなくなり、意欲的にリハビリに取り組むようになった。その結果、自宅での日常生活が自信を持って行えるまで回復し、退院することができた。

Ⅳ 考 察

アンダーウッド¹⁾²⁾は、次のように述べている。

「看護者と患者の関係は、セルフケアを高めていく事を目標としており、患者が抵抗したり、拒否する状況であっても、その関係を継続していく責任がある。多くの精神障害者は日常何らかの障害をきたしており、この様な患者に個別的なアプローチを試み患者の自己決定能力を高める事によってセルフケアを達成する事が可能となる。」

今回の症例の場合、骨折という身体的障害と、うつ病による活動エネルギーの低下が複雑に影響し、歩行意欲を妨げ、拒否、依存的態度を示していたと考えられる。

私達は、この患者にとって重要なことは確実な内服、十分な栄養や睡眠、適度な運動と考えて患者の負担とならないよう、患者とのかかわりの中に、ある程度の距離をおきながら見守り、日常生活の援助を行った。患者を病室から連れ出し他患との接触をはかったことや、看護婦と接する時間を多く持ったことは、妄想から遠ざけうる意味で始めたことであるが、それだけでなく、誰かが自分の傍らにいて話を聞いてもらえるという安心感を得たという点でも効果があった。

患者の表現することに対して、否定、肯定するのを避け、患者に関心を向けることによって、自分を受けとめてくれる人がいる、という満足感を患者に持たせるといわれているが、今回、患者が少しずつ自分の気持ちを率直に話すようになったことを考えてみても、私達の行った看護は、効果的であったと思われる。そして、そのような精神的安定が、結果的に、リハビリに対する意欲にもつながったと考えられ看護婦に対する依存心が信頼へと変わりつつある時期に急激にリハビリの効果やセルフケア行動も高まりをみせたように思われる。看護婦の熱心な働きかけが患者の依存心を助長することもあり、看護の目的を前面に出した働きかけでなく、自発性を伸ばす意味で何気ない生活場面における患者との接触を大切にし、時には見守るという態度が患者の行動を引き出すのに効果があったと思われる。

Ⅴ お わ り に

言葉や行動による働きかけが、いかに効果を成し得たかを評価するのは、時として困難なことが多い。私達が今回行った看護援助では、患者が自分に自信が持て退院するという良い結果を得ることができたが、今後更に個別性のある看護を行うため、日々努力していきたいと思う。

引用・参考文献

- 1)2) 南 裕子・稲岡文明監修：セルフケア概念と看護実践，p.45，p.71，へるす出版，1987.
- 3) 佐藤孝三・佐々木司郎・神郡 博編集：精神科看護事例集，医学書院，1977.
- 4) 小林富美栄監修：精神科看護学，金芳堂，1980.
- 5) 笠原 嘉他：現代のうつ病，精神科看護，第28号，1991.

（平成4年10月30日，岡山にて開催の第20回中国・四国地区精神保健学会で発表）